

病害虫発生予察情報(4月予報)

令和4年3月24日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (4月の県平均平年値)	予報の根拠
温州みかん	そうか病	発生量：少	3月上旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：並か高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ミカンハダニ	発生量：やや多 (寄生葉率4.6%)	3月上旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：並か高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
かんきつ	かいよう病	発生量(中晩柑)：少 発生量(温州みかん)：並 (中晩柑 発病度(葉)0.8) (温州みかん 発病度(葉)0.2)	3月上旬発生量(中晩柑)：少 (－) (ウツクミカ)：並 (±) 気象予報：気温：並か高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
果樹全般	チャバネアオ カメムシ	発生量：並 (ただし中部地域はやや多)	越冬虫数：並 (±) ただし、中部地域はやや多 (＋)
茶	カンザワハダニ	発生量：やや少 (摘採面寄生葉率2.1%)	3月上中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：並か高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	チャハマキ	発生量：やや少 (幼虫数0.05頭/1.25m ²)	3月上中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：並か高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	チャノコカクモン ハマキ	発生量：やや少 (幼虫数0.04頭/1.25m ²)	3月上中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：並か高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
トマト	灰色かび病	発生量：やや多	3月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：並か高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	葉かび病・ すすかび病	発生量：多	3月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：並か高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：やや少 コナジラミ類発生量：多	3月中旬発生量 黄化葉巻病：少 (－) コナジラミ類：多 (＋) 気象予報：気温：並か高い (＋)

作物名	病害虫名	予報 (4月の県平均平年値)	予報の根拠
いちご	灰色かび病	発生量：やや少	3月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：並か高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	うどんこ病	発生量：少	3月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：並か高い (＋)
	炭疽病	発生量：やや多	3月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：並か高い (＋)
	アザミウマ類	発生量：多	3月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：並か高い (＋)
	ハダニ類	発生量：やや少	3月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：並か高い (＋)
	アブラムシ類	発生量：多	3月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：並か高い (＋)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県)の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県)の過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報
はこちら
で検索!



静岡県農薬安全使用指針
・農作物病害虫防除基準

<http://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【温州みかん】

●そうか病

予報の根拠

- ・ 3月上旬の巡回調査では、葉での平均発病度は0.02（平年0.06）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 本病は葉や果実の若い時期に発病しやすく、生育が進むにつれ発病しにくくなる。特に展葉初期の降雨は感染を助長するため、薬剤防除を行う。
- ・ 苗、若木での発生が多い病害であるため、新植や改植をしたほ場では発生に注意する。
- ・ 被害のある夏秋梢は伝染源となるため、除去する。また前年に多発したほ場は伝染源を翌年に持ち越しやすいため発生に注意する。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・ 3月上旬の巡回調査では、平均寄生葉率は2.2%（平年2.4%）と平年並であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並のため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ マシン油乳剤を散布する場合、散布むらや散布直後の降雨で効果が低下するので、晴天の日が2～3日続く時に防除を実施する。

【かんきつ】

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 3月上旬の巡回調査では、中晩柑類の葉での平均発病度は0.1（平年0.9）と平年より少なかった。温州みかんの葉での平均発病度は0.03（平年0.06）と平年並であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 罹病葉のついた夏秋梢は、重要な伝染源となるので早急に除去する。
- ・ 中晩柑類では、発芽前、5月上旬及び下旬、6月下旬（梅雨期）に薬剤防除を行う。温州みかんでも、昨年または現時点で本病の発生が見られたほ場では、中晩柑類に準じた防除を行う。ただし、新芽は薬害が出るので発芽後～新梢伸長期は薬剤散布を避けた方がよい。
- ・ 防風垣、防風網の整備等を行い、防風対策に努める。

【果樹全般】

●チャバネアオカメムシ（越冬状況）

予報の根拠

- ・今年1月における越冬量調査では、チャバネアオカメムシ越冬虫数が1.0頭/m²（平年1.1頭/m²）と平年並であり、春期の発生量は県全体として平年並と考えられる。ただし、中部地域の越冬虫数は1.8頭/m²（平年0.9頭/m²）と平年よりやや多いため、春期の発生に注意する。

防除対策

- ・地域や園地によって発生状況が異なる場合があるため、ウメ・ビワではほ場における発生をよく観察し、早期発見・防除に努める。

【茶】

＜生育の概況＞

茶業研究センターの報告では、新芽の生育は3月14日までは平年より早く、昨年より遅い状況である。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・3月上中旬の巡回調査では、樹冠面（摘採面）での寄生葉率0.4%（平年1.0%）、裾部での寄生葉率0.7%（平年1.7%）と平年より少なかった。ただし一部の園地で、平年に比べ発生がやや多い報告がある。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並のため、本種の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・樹冠面の葉に寄生が見られる茶園では早期に防除を行う。その際、葉裏に薬液が届くように散布する。
- ・凍霜害等を受けた茶園では、被害を受けなかった新芽にハダニが集まり集中加害することがあるので、防霜対策を万全にする。
- ・新芽がハダニの被害を受けた場合は、薬剤の摘採前日数に注意して直ちに防除を行う。

●チャハマキ・チャノコカクモンハマキ

予報の根拠

- ・3月上中旬の巡回調査では、チャハマキの越冬幼虫数は0.2頭/1.25m²（平年0.3頭/1.25m²）と平年よりやや少なく、コカクモンハマキの越冬幼虫数は0.1頭/1.25m²（平年0.3頭/1.25m²）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並のため、本種の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・昨年は両種ともに1世代発生が多かったことから、秋の防除を実施しなかった茶園では越冬幼虫の密度が高い可能性がある。防除適期は越冬世代成虫の発蛾最盛期の後（一番茶摘採後：4月下旬～5月上中旬頃）となる。

<その他病害虫>

●褐色円星病（緑斑症）

防除対策

- ・3月上中旬の巡回調査では、平均発病葉率は17.1%（平年18.3%）と平年並であった。
- ・本病は、多発すると一番茶萌芽期から生育期に下葉が落葉し、品質・収量への被害が大きくなる。薬剤による防除適期は夏期以降となるが、被害は一番茶生育期に顕著となるため、被害が大きかった茶園では、この時期に発生状況を確認しておき、夏～秋期に防除を実施する。

●マダラカサハラハムシ

防除対策

- ・近年、葉を食害される被害が発生した茶園が増加している。これらの茶園では一番茶芽に越冬成虫による被害が発生するおそれがあるため、一番茶生育期に薬剤防除を行う。なお、各地区の防除規制や摘採前日数に注意する。

【トマト】

<生育の概況>

生育は平年並である。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率10.5%（平年8.9%）と平年並であった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並のため、発生をやや助長する（本病の生育適温は18～23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、施設内の除湿に努める（例として、不要な下葉を除去する、日中の換気を早めに行う、かん水量を必要最低限にする）。
- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・発病した果実や茎葉は伝染源となるため、速やかに取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。
- ・植物体への結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより施設内の湿度低下に努める。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率12.3%（平年5.6%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並のため、発生をやや助長する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度と比較的高温を好み、多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・葉かび病については、抵抗性品種（Cf-9）を侵すレース 2.9 の発生が県内で確認されている。本県では 12 月以降、発生が増加する傾向があるため、抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い、発生に注意する。
- ・本病は潜伏期間が 2 週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・3 月中旬の巡回調査では、黄化葉巻病の平均発病株率は 0.4%（平年 2.5%）と平年より少なかった。
- ・コナジラミ類の平均寄生株率は 20.7%（平年 4.7%）と平年より多かった。
- ・1 か月予報では、気温は平年並か高いため、媒介虫であるタバココナジラミの増殖をやや助長する。このため、本病の発生もやや助長される。

防除対策

- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、適切に処分する。
- ・わき芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・今後、気温が上昇しタバココナジラミの発生に適した条件となる。成虫の新芽や葉裏への寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。
- ・収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、植物体を完全に枯死させ、黄色粘着板を設置し本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。

【いちご】

<生育の概況>

生育は地域によって異なるが、平年よりやや早い～やや遅い状況。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・3 月中旬の巡回調査では、平均発病株率は 0.4%（平年 2.8%）と平年より少なかった。
- ・1 か月予報では、気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・本病は気温が20℃前後、多湿条件下で多発生する。そのため、施設内の多湿や、朝夕の冷えこみによる植物体の結露は、本病の発生を著しく助長する。循環扇や暖房機の利用、換気、かん水量の調整等で湿度を管理し、ハウス内の除湿、結露防止に努める。
- ・曇雨天が続く場合は薬液散布でなく、くん煙剤を利用した防除を行うことでハウス内の湿度上昇を防ぐ。
- ・株の過繁茂は多湿による発生を助長し、発病した果実や茎葉は有力な伝染源となる。下葉除去を適切に行うと同時に、伝染源となる発病箇所や不要な果梗枝は取り除き、ほ場外で処分する。
- ・発病前から定期的に予防散布を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率1.2%）。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・胞子の発芽適温は20℃前後であり、気温の上昇に伴い施設内は発病に好適な環境となりやすいため、発生予防に努める。
- ・多発生すると防除が困難になりやすいため、ほ場での発生状況に注意し、発生初期に速やかに防除を行う。
- ・株の過繁茂は発生を助長させるため、下葉除去を適切に行う。果実での発生にも注意し、不要な果梗枝や発病果は速やかに除去する。

●炭疽病

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、平均発病株率0.8%（平年1.0%）と平年並であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・発病株から周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・発病株は培地も含めて抜き取り、ビニール袋に入れて圃場外へ出し、殺菌処理をしてから残渣を処分する。
- ・気温の上昇に伴い、再び病徴が進展するため、新たな発病に注意する。また、開花、着果により株に負担がかかると萎凋症状が進展する場合がある。
- ・発生ほ場の栽培株は潜在感染している恐れがあるため、健全に見えても親株に使用しない。
- ・発生ほ場では、栽培終了後の土壌や資材の消毒を徹底する。

●アザミウマ類

予報の根拠

- ・ 3月中旬の巡回調査では、平均寄生株は16.1%（平年11.1%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並か高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 花での発生状況をよく観察して早期発見に努める。発生を認めた場合は防除を実施する。ただし、ほ場で天敵を使用している場合は、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。
- ・ 花はアザミウマ類の増殖場所となるため、必要のない花を摘花する。施設内外の雑草や花き類も、アザミウマ類の発生源となるため、除去する。
- ・ 4月以降気温が高くなると、ハウスを開けることでアザミウマ類の飛び込みが増える。施設開口部には防虫ネット（目合1mm以下）を被覆し、施設外からの成虫の侵入を防ぐ。ただし、被覆により施設内の温度・湿度が高まるため、換気に注意する。
- ・ 栽培終了する場合は施設を密閉して、蒸し込み処理を10日以上行い、残存虫を死滅させる。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 3月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は3.7%（平年14.6%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並か高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ ハダニ類の寄生が認められた場合は少発生うちに防除を徹底する。薬剤抵抗性の発達を避けるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- ・ ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、物理的防除剤や天敵を利用する。なお、物理的防除剤は殺卵効果、残効性が低いため、5日前後の間隔で複数回散布する。
- ・ 天敵を利用している場合は、ハダニ類と天敵の発生状況をよく観察し、防除の成否を確認する。防除が不足している場合は天敵の追加放飼、または薬剤散布をする。薬剤散布する場合は、ほ場で使用している天敵に影響の少ない薬剤を選択する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・ 3月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は5.3%（平年1.8%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並か高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ アブラムシ類の発生に注意し、初期防除に努める。すでに発生しているほ場では早急に防除する。
- ・ アブラバチを利用している場合は、寄生蛹（マミー）の発生状況をよく観察し、防除の成否を確認する。薬剤散布する場合は、ほ場で使用している天敵に影響の少ない薬剤を選択する。

【稲】

<その他病害虫>

●苗立枯病、いもち病(苗いもち)、ばか苗病、もみ枯細菌病、イネシンガレセンチュウ

防除対策

種子消毒（作業を省かず、以下の点に留意して行う。）

- ・自家採種の種もみは塩水選を必ず行う。
- ・「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準（ホームページ<http://www.s-boujo.jp/>）」に掲載の種子消毒法の手順を守り実施する。
- ・厚まきは発病を助長するため、適正な種量を守る。

育苗管理

- ・出芽期は30℃以上、緑化期は25℃以上の高温とならないよう温度管理に注意する。
- ・本県では、MBI-D 剤（ウィン、デラウス、アチーブ）に対し、いもち病で耐性菌の発生事例がある。また、他県ではQoI 剤（嵐、アミスター、オリブライト、イモチエース、イモチミン、オリザトップ）でも、いもち病で耐性菌の発生事例がある。これら耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。詳細は日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会ホームページの「殺菌剤使用ガイドライン」（<http://www.taiseikin.jp/guidelines/>）を参照。

●縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

防除対策

- ・常発地では媒介虫となるヒメトビウンカの箱施用剤による防除を徹底する。

●トビイロウンカ

防除対策

- ・一昨年はトビイロウンカが多発した。日本での発生量は年によって大きく異なり、海外からの飛来時期、量、回数等に影響される。このため、本虫に効果の高い薬剤（トリフルメゾピリム等）を含む育苗箱施用剤による予防防除を徹底する。なお、本虫はイミダクロプリド（アドマイヤー等）に対する感受性低下が報告されているため、本剤が含まれている育苗箱施用剤はトビイロウンカ対策に用いないよう注意する。

●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ等）

防除対策

- ・主要種のアカスジカスミカメは雑草に産み付けられた卵で越冬し、春に孵化する。孵化直後は、水田周辺のイネ科雑草（スズメノテッポウ、セトガヤ、早生型チガヤ）が寄主植物となることから、4月中に除草すると効果的である。ただし、成虫の行動範囲は最大で半径 300m 程度と広く、個々の水田周辺を除草するだけでは十分な防除効果が得られない場合もあるため、地域ぐるみで除草することが重要である。

●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

防除対策

- ・ 県内全域で分布が拡大している。昨年の7～9月に水田内や水路で赤橙色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。
- ・ 周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて貝を破砕する。なお、スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめること。

【小麦】

＜その他病害虫＞

●赤かび病

防除対策

- ・ 4月に発生が少なくても、5月に多発することがあるので予防散布に努める。特に出穂期から乳熟期にかけて、気温が高く降雨が続くような場合は注意する。
- ・ 防除適期は開花期前後となるので、一回目の薬剤散布を穂揃期から5日目までに行い、さらにその5～7日後に二回目の薬剤散布を実施する。

●うどんこ病・赤さび病

- ・ 昨年4月中旬の巡回調査では、うどんこ病の平均発病株率は54.8%（平年5.5%）、赤さび病の平均発病株率は17.2%（平年0.2%）と平年よりもかなり多かった。
- ・ 本県の奨励品種である「きぬあかり」はうどんこ病にやや弱く「イワイノダイチ」、「農林61号」より赤さび病も発生しやすい。
- ・ うどんこ病の第一次伝染源は前年の被害残渣で越冬した病原菌であり、赤さび病の第一次伝染源はほ場に落下した穀粒で越冬した病原菌である。よって、前年多発したほ場では発生に注意する。
- ・ 止葉の一枚下葉の展開期以降～止葉抽出期に薬剤の予防散布を行う。
- ・ 窒素肥料の過多を避ける。

3 季節予報

● 1か月予報 (東海地方 令和3年3月17日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 3月19日から4月18日

【予想される向こう1か月の天候】

特に注意を要する事項		期間の前半は気温の変動が大きい見込みです。
向こう1か月	天候	天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。
1週目	気温	1週目は、平年並または低い確率ともに40%です。
2週目	気温	2週目は、高い確率50%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	20	40	40
1か月	降水量	30	40	30
1か月	日照時間	30	40	30
1週目	気温	40	40	20
2週目	気温	20	30	50
3～4週目	気温	20	40	40

【予報の対象期間】

1か月	:	3月20日(土)～4月19日(月)
1週目	:	3月20日(土)～3月26日(金)
2週目	:	3月27日(土)～4月2日(金)
3～4週目	:	4月3日(土)～4月16日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病虫害防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--